

「コロナ後の社会を考える ～環境福祉学の視点から～」

社会福祉法人恩賜財団 済生会
理事長 炭谷 茂

恩賜財団済生会理事長を務めております、炭谷と申します。私がいま一番考えているテーマについて、本日このような場で話をさせていただくことは大変光栄であり、先ほど阿部先生が話されたことは、まさに私の結論と一致していると感じております。それではまず最近の動きから、われわれが直面する大きな問題を3つ取り上げてみたいと思います。

コロナ後の社会を考える ～環境福祉学の視点から～

社会福祉法人恩賜財団 済生会 理事長
地球・人間環境フォーラム 理事長
炭谷 茂

1 最近の動きから

(1) 新型コロナの蔓延

① 新型コロナウイルスの発生原因

- 1) 中国奥地の森林のコウモリ体内に生息
森林破壊により人間と接点
環境破壊 → 人間の健康への被害

2) SARS, MERSも環境破壊が原因

- 重症急性呼吸器症候群 (SARS)
2003年 広東省 ハクシン、タスキ、ネズミ等
中東呼吸器症候群 (MERS)
2012年 中近東 ヒトコブラクダ

3) 環境破壊が継続する限り新型のウイルスは、出現 哺乳類、鳥類に170万種の未知のウイルス うち82万種の未知のウイルスが人に感染のおそれ → 感染症常在時代として対策

② 新型コロナの海外の被害事例

- 低所得者や有色人種は、感染率・死亡率が高い
劣悪な住環境
人との接触が多い職業
医療へのアクセス、ワクチン接種

③ 国内において新型コロナ感染者、医療従事者に対する差別・排除の発生

- 近年の日本社会の人の結びつきの弱体化が背景

(2) 地球温暖化の被害

- ① 地球温暖化の進行
1906～2005 0.74℃の上昇
19世紀までの1000年間で±0.2℃の変化

一つ目は、新型コロナの前はどうであつたか、そしてその後どうなるかということです。もともと新型コロナは、現段階では中国奥地にいたコウモリからのウイルスが人間に伝播したということが、国際社会の一般的な考え方かと思えます。なぜそうなつたのか。これは本来であれば数千年にわたってじっとしていたコウモリが、森林の開発によって人間と接するようになった。まさに環境破壊という人間の行為によって、新型コロナ

ウイルスが人類を襲うようになったわけです。SARS や MERS も同じで、人間の開発行為によって、自然界にあつたものが我々人類を襲うようになった。このようなことは、いま地球上に数多く存在するのです。ある論文によると、現在哺乳類や鳥類の中に、約170万種の未知のウイルスがいるのではないかと推計もあります。そのうち82万種が、想像できない数のウイルスであり、人間の健康を襲い、影響を与えるだろうと言われていています。そうすると、人間の環境開発が今後も進み、ジャングルや山林がどんどん開発されていくと、いつか82万種のウイルスが次々と起こってくるわけです。ですから、既に私どもは感染症が常在する時代、新型コロナはまた必ず起こる状態を毎日の生活を送らなければいけない時代になったと思います。私自身現在83の病院を経営しております。ここ大阪でも8つの病院を経営していますが、どの病院でもこれからも感染症が来るという前提でやろうと申し合わせています。

ここで厄介なことがあります。新型コロナは、貧困者や貧しい国において被害がより大きいという結果が欧米で出ました。何故かと言えば、貧しい人たちは劣悪な住環境にあり、サービス業など人との接触が多い職業に多く従事されています。また医療へのアクセスやワクチンがなかなか打てないといったことから起こっていると思います。新型コロナによる感染者や死者は、貧困者のほうに多い。これは何か社会の矛盾のように思うのです。

では日本ではどうだったか。比較的日本ではそのようなことはなかったと思うのですが、ただ私は感染者に対する差別が起こったことを大変情けなく思っております。感染者がまさに大変厳しい状態にある時に、それに対して社会が排除や差別をしてしまうということが起こりました。

また、実はあのダイヤモンドプリンセス号が横浜港へ来航した時、一番近くにあった病院は我々済生会東部病院でした。ですから真っ先に、ダイヤモンドプリンセス号の重症患者は東部病院で治療に当たりました。その後、私は看護部長から報告を受けて驚愕しました。東部病院の看護師さんの子どもさんは保育所に来てもらっては困るということを言われたそうです。いま一番大変で看護師さんがそれに当たっているのに、お子さんをどうするのだと。正にこのような時こそ人々が助け合わなければいけない時代なのに、まさにその逆のことが起こってしまったというわけです。これが第1の問題です。

<p>② 地球温暖化による被害は、貧困地域、社会的弱者に集中影響が発生しやすい地域に居住 予防や被害対策の資金・技術の不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海面上昇による被害 貧困なバングラデシュ、南太平洋島嶼部に集中 ・巨大化するハリケーン・台風等の被害 2005年 カトリーナ 死者 1,800人以上 15兆円の被害 ルイジアナ、ミシシッピ等の貧困な黒人に被害が集中 ・熱中症等健康被害 2003年 フランス等ヨーロッパに熱波 高齢者を中心に3万5千人死亡 日本 平成22年(2010)記録的猛暑1,731人死亡の うち65歳以上1,372人 <p>③ 地球温暖化対策の矛盾 1) 2005年 ブッシュ政権がバイオエタノールの振興 穀物価格の急騰 貧困者に打撃</p>	<p>2) 電気自動車等搭載の燃料電池に必要なレアメタル 需要急増 → 生産国の無秩序な採掘 → 貧困地域の立ち退き 貧困地域の環境悪化 住民の健康被害</p> <p>(3) 子どもを巡る深刻な問題 ① 問題の状況 1) 小・中・高校でのいじめ 令和3年度 62万件 → 4年度 68万件(過去最多)</p> <p>2) 校内暴力 小・中・高校での校内暴力 令和3年度 76千件 → 4年度 95千件</p> <p>3) 不登校、引きこもり 小・中学校不登校 令和3年度 24万人 → 4年度 30万人(過去最多)</p> <p>4) 自殺件数 小・中・高校生 令和3年度368人→4年度512人</p>
---	--

二つ目は、地球温暖化問題です。19世紀まで地球はほぼ気温は上がりませんでした。19世紀から20世紀に0.74℃、今では1.28℃まで上がってきています。ここで私が強調したいのは、このような地球温暖化の被害は、先ほどの新型コロナと同じように、貧困地域や社会的弱者に集中しているということです。これも世の中の矛盾と私は思っています。やはり彼らは環

境の影響を受けやすい所に住んでおり、予防や被害対策の資金や技術力が不足していることに起因するのだと思います。

例えば海面上昇による被害は、まさに世界最貧国であるバングラデシュや、南太平洋の島嶼部、ツバルやキリバスなどそういうところがまず被害を受けているわけです。またハリケーンも巨大化していますが、最初に最も大きな被害が生じたのは、2005年のカトリーナだと思います。アメリカの南部を襲い、その時の死者は1800人でした。アメリカは非常事態宣言を出してこれに対処しますが、この時被害が出たのもルイジアナ州やミシシッピ州の貧しい地域、かつ被害を受けたのも黒人等の貧困者が多かったわけです。

また、熱中症患者。今年の夏も熱中症で亡くなられた方もおられます。これが特に注目されたのが、2003年ヨーロッパを襲った熱波だと思います。ヨーロッパには、家には大抵冷房装置はありません。そのために高齢者を中心に3万5千人が死亡した。弱い立場の人に熱中症の被害が集中した。これは日本も同じで熱中症の被害は、弱い立場の高齢者に集中しています。そう考えると、まさに環境被害は、福祉に対する影響が大変大きい。これからもより大きくなっていくのだらうと思います。

そこで地球温暖化対策が講じられるわけですが、この対策自体が福祉と矛盾する場合があります。代表的な例が、2005年にブッシュ大統領が地球温暖化のために、補助金を出してバイオエタノールを推奨します。化石燃料をやめる代わりにそうしようとしたわけですが、トウモロコシやサトウキビなど本来は食料に回すべきものが燃料に回ってしまいました。そこで起こったのが穀物価格の急騰です。貧しい国の人や貧しい人々の生活を貶めてしまうことになり、環境に良いことをしているつもりが、片方では福祉に大変悪影響を与えてしまうことが起こっているのです。最近で言えば、燃料電池や電気自動車などもそうです。勿論環境には良いことですが、そのためにはレアメタルが必要となります。レアメタルは中国やアジア、南米等で採れますが、その採掘状況を見てみると、そこに住んでいた住民を強制的に立ち退かせています。また採掘方法が非常に乱暴なため、その地域の環境を破壊し、住民の健康を侵しています。燃料電池、電気自動車はこれからの環境には良いかもしれませんが、一方で大きな影の部分、貧困者や弱い立場の人を苦しめていることへも注目をしなければいけないと思います。

三つ目は、日本では最大の問題、少子化問題です。少子化問題は、これから大変大きな社会問題の一つになります。子どもについて、いま学校において大きな問題にぶつかっています。例えば小・中・高校のいじめは、昨年度は過去最多に、また不登校、引きこもりも過去最多、校内暴力も増える一方です。折角この世に生まれてきたのに、小学生が自ら命を絶つ。このようなことは

昔では考えられなかったのですが、自殺者も増えつつある状況です。

<p>② 問題の背景</p> <p>1) こどもの環境の激変 仙田満「子どもを育む環境 蝕む環境」 (朝日新聞出版)</p> <p>20世紀前半まで 道や広場での遊び 1960年代 車とテレビにより外遊びと内遊びが逆転 1990年代 子どもへの犯罪の増加 内向化 2000年代 スマホの席巻</p> <p>2) 平成10年の「青少年教育活動研究会」 (代表 平野吉直教授)の調査 現在は国立青少年教育振興機構が継続調査 自然体験の減少 広場や海、山での遊び 星、日の出、夕焼けの観察 自然体験と道徳観・正義感の関係</p> <p>3) 環境省からNPO「青少年自立支援センター」に委託 平成15年度～17年度 引きこもり、不登校の43名の子どもたちに自然体験 すべて改善傾向</p> <p>(4) 環境と福祉の双方を考えなければならぬ 平成16年 環境福祉学会を創設</p>	<p>2 環境福祉学の応用</p> <p>(1) 環境の福祉への活用 公園、里山等の整備 オクダヴィア・ヒルの事業 結核等感染症対策のために19世紀後期にオープンスペース</p> <p>(2) 福祉の環境への貢献 コミュニティガーデン運動</p> <p>(3) 環境と福祉の融合 ① ソーシャルファーム(社会事業所) 平成元年 東京都「ソーシャルファーム設立促進条例」制定</p> <p>障害者、引きこもりの人、元受刑者等社会的弱者の仕事としてリサイクル、有機農業等環境の仕事 → 人とのつながりの形成へ「ソーシャルファームジャパン」 として2千社の設立を目指す</p> <p>1) 栃木県小山市社会福祉法人「バステル」 知的障害者が「桑の葉プロジェクト」 桑の葉のパウダーでパン、クッキー、うどん等 平成27年(2015)9月、養蚕業を開始 令和2年(2020)12月、笠間稲荷神社の繭の品評会で 最優秀賞</p>
---	--

これらのことは、少子化問題とともに子どもの抱える最大の福祉問題だと私は思っています。これも、実は環境ととても関係があります。何かというと、子どもの環境は激変しています。これは建築家の仙田満先生の本に書いてあるのですが、20世紀前半まではだいたい道路や広場で遊んでいました。しかし道で遊ぶのが危なくなり、1960年代は外遊びが少なくなり内遊び

のほうが多くなったようです。そして1990年代から子どもの誘拐やいたずらということが増えました。となると外で遊んではいけな、川遊びは危ないと言き内向き志向になっていき、更に今では家の中で、スマホで遊ぶことになりました。このように、子どもたちの環境が激変しているわけです。

平成10年青少年教育活動研究会の調査が行われています。当時環境省の事務次官をしている私に、有馬文部大臣(当時)より、「炭谷くん、この調査面白いから一度環境省としても見ておいたほうがいいよ」と教えていただいたものです。見てみると大変面白いもので、当時信州大学准教授をされていた平野吉直先生が1万1千人の小中学生の実態調査を行ったものでした。現在は国立青少年教育振興機構がこの調査を引き継いでいます。これは皆さまもお分かりのとおり、自然体験が少なくなっているということです。先ほどの仙田満先生と同じことと思いますが、例えば子どもたちは夜空の星を見るのか。平成10年の男の子ということでしたが、71%がほとんど見たことがない、もしくはあまりないと回答しています。夜空を少し見れば星が綺麗だ、いまはシリウスが大変綺麗で私などは東京でもよく見ますが、いまの子は見ません。また日の出や夕焼け、確かに日の出は早起きが必要ですが、夕焼けはほとんどの子どもは見ているかなと思いましたが、平成10年の時、もうそうではないのです。77パーセントの子どもは日の出や日の入りを見たことがない、もしくはあまり見たことがないと答えているのです。随分子どもたちの環境は激変しているわけです。

それだけであれば、この調査は別にそうだろうと納得するだけです。重要なのが、そのような自然体験と子どもたちの道徳観や正義感の関係を調べたことが、平野先生の優れたところなのです。正しいことをしよう、人に思いやりを持って接しよう、いじめをなくそう。このようなことをしている子どもと自然との相関関係を見たところ、自然とのふれあいの多い子は正義感や道徳心が高い。家の中に閉じこもっている子は、正義感や道徳心がない。このようなことが見事に相関関係として出ていることが分かり、発見されました。これは青少年教育振興機構で継続して調査されていますが、同じような結果が出ています。

そこで、有馬先生からも助言を受けたので、環境省で何かできないか考え、東京の福生市にある青少年自立支援センターにお願いして、43名の引きこもりや不登校の小中学生を集めていただいて、そのような子どもたちに対して、環境を改善すれば逆に良くなるのではないかと、先ほどの調査の逆のことを試しました。やったことは単純なことです。1か月に1回だけ東京の多摩川の河川敷で遊んだり、公園で遊んだり、山梨県に行って鷹匠という鷹を操る人と接したり、そういうことを1か月に1回だけ行い、その変化を、心理学者や精神医学者にチェックしてもらいました。その結果、全てが良くなりました。そして引きこもりや不登校をやめる子が多くなりました。やはり環境というものは重要だということを実感したわけでありました。

このようなことで、これから大変重要な問題、コロナの問題も、地球環境の問題も、子どもの問題もそうですが、これらを考えるときには、環境と福祉を一緒に考えなければ駄目ではないかということで、平成16年に私は環境福祉学会というものを創設しました。現在私が学会長をさせてもらっていますが、当初は川崎医療福祉大学の名誉総長だった江草先生にお願いしました。そこで、これからのまさに新しい社会を構想するにあたって、環境福祉学の切れ味はどうだろうかということが試されるわけでありました。

まず、環境というものを福祉に応用してみたらどうでしょうか。実はこれは本を調べてみると、もうすでに先輩がいらっしゃるのです。オクタヴィア・ヒル、ナショナルトラストを創設した女性です。彼女は社会事業家で19世紀末に活躍した女性ですが、私自身は4年間イギリスで勉強していましたので、よく彼女が切り開いたナショナルトラストを訪問させていただき、楽しい思い出として印象に残っています。

彼女がやったもう一つのことは、当時蔓延していた結核等のために、オープンスペース、広場や公園をたくさん作らなければいけないという活動をして効果を得るのです。まさに広場を作る、環境を良くする、これが当時としては結核、いまでは新型コロナにも当てはまりますが、その疾病対策に役立つということを提唱し、実行しました。今日ロンドンなどに行くと公園がたくさんあります。そのいくつかは、彼女の努力が報われた結果だと思えます。

一方、福祉の側から環境にお手伝いできることはないかということですが、これにはコミュニティガーデン運動が挙げられると思います。1970年代、イギリスで起こりました。障害者や高齢者の人が、自分たちが公園を作ったり広場の手入れをしたりしようではないかということが起こりました。この運動は、アメリカなどいろいろな国に影響を与えていきます。

この活動を日本でもできないかと思うようになりました。私はこの大阪で、学生時代から釜ヶ崎でいろいろ活動していますので、釜ヶ崎でこの中の何かができないかと考えました。そうすると私の仲間たちが、それであれば大阪の住吉公園の中に小さな花壇を作る、このようなことをやれば一種のコミュニティガーデン運動ではないかということで、いまから10年ほど前に、まず日本第1号のコミュニティガーデンを大阪の住吉公園に作ってくれたわけでありました。その花壇を作ったのは、まさに釜ヶ崎で当時多かったホームレスの方や釜ヶ崎で居住されている方々でありました。

次に、環境と福祉をばらばらに考えるのではなく、これを一緒に融合する、こういう試みはできないか、これが私の次のチャレンジでした。そこで考えたのが、ソーシャルファームです。これは1970年代、イタリアのトリエステで生まれました。イタリアのトリエステには、ヨーロッパといわれた立派な精神科病院がありました。私もいまから8年前に訪れました。1200人の精神科疾患の患者さんを入院させていたわけですが、それを見た院長のバザーリアは、こういうところにいると人権侵害が起こってしまうということで、1200人の患者さんを次々に退院をさせて外来治療に移し、その精神科病院を廃止してしまいました。ただ、退院した以上は働かなければいけません。その働く場所も作ったのです。それがソーシャルファームの始まりです。ですからソーシャルファームとは、精神障害者のように普通の職場ではなかなか働けない、このような人たちが働くために作ったものです。ですからトリエステでは私どもが泊まったホテルもソーシャルファームで、半分は精神障害者、半分は一般住民が働いていました。それからリサイクル工場もありました。またヨーロッパNo.1のバラ園もありました。このようなかたちで発展し、いまではヨーロッパではイタリアだけではなくほとんどの国にあり、いまでは何らかの事情で一般就労ができない、例えば元受刑者、外国人、DV被害者などの人たちに対してソーシャルファームとして職場を提供しています。このような職場が、いまではヨーロッパでは1万社以上あります。

そこで私は、是非日本に2000社作ろうということで、平成20年にソーシャルファームジャパンという組織を立ち上げました。何か立派そうな名前ですが、まさにこのような希望を持っている有志が集まって作った小さな組織です。2000社というのは単純な目標で、ヨーロッパには1万社あり、人口割合から約5分の1で2000という数字を掲げたものです。しかし私どもに財力はそれほどありませんので、大きなことはできません。隣の韓国では、私どもと同時期に始めたのに、既に私の目標と掲げている3000社を今日現在超えています。私どもは残念ながら200社程度で、まだ10分の1にも届いていません。ただそれを見た小池東京都知事は、私の環境省事務次官をしている時の上司ですが、令和元年12月に東京都でソーシャルファーム設立促進条例を作ってください、応援いただいています。これによって、東京都では50社程度のソーシャルファームが設立されるまでに至りました。

私どもがおこなっている、特に環境をうまく使った、環境と福祉を融合すれば大変うまくいくような事例がたくさんあります。これをご説明したいと思います。一つは、栃木県小山市の社会福祉法人パステルです。これは知的障害者が働くのですが、小山市はかつて養蚕業が盛んなところでした。結城紬等の立派な絹製品を生産し、いまでももちろんあるにはありますが、すっかり養蚕業は衰えています。それであればこれを再興しようということで、パステルが立ち上がりました。そこで約1400本の桑の木を植えました。桑というのは大変早く育つのです。そこでこの桑の葉を採って、これを乾燥させパウダーにして、パンやクッキーやうどん等を作ります

た。これは大変評判が良く、道の駅等で売ることができました。さらに栃木県のほうでは、第6次産品の第1号というかたちで指定をされるまでになっています。地元の小山市では、桑産業を復興していこうと、9月8日を桑(くわ)の日として指定し、このパステル事業を応援してくれています。であれば本格的な繭作りをやりようということで、平成27年に養蚕業を開始しました。約2万頭の蚕を買いました。蚕は家畜として頭で呼びます。そして毎年茨城県の笠間稲荷神社で繭の品評会が行われます。これは全国のプロの養蚕業者が集まるわけですが、その中で令和2年には知的障害者が作った繭がトップ、1位に輝いたわけであります。

<p>2) 大阪市一般社団法人「緑の風西川」 障害者、元受刑者がカバンの製造 北海道のエゾシカの皮の活用 →「マタギプロジェクト」</p> <p>3) 埼玉県飯能市NPO「たんぼぼ」 引きこもりの人、長期失業者が 固定種による自然農業</p> <p>4) 東京都荏野市一般社団法人「インクルーシブ」 障害者による古本販売 インターネットで販売</p> <p>②環境福祉のまちづくり</p> <p>1) ブラジル・クリチバ「緑の交換事業」 スラム街で分別したごみと野菜を交換 中村ひとしが指導</p> <p>2) コンパクトシティ 富山市 LRTを活用し、マイカーの抑制 病院、図書館などを集中化、住宅の移転</p> <p>3 これからの社会のあり方</p> <p>(1) 学生時代から「福祉国家」への夢を抱いてきた 1942年 ベヴァリッジ報告(福祉国家の理論的基礎)</p>	<p>5つの巨悪 貧困、劣悪な環境、病気、無知、怠惰 → 環境は福祉国家の重要な要素</p> <p>(2) 戦後ヨーロッパ、オセアニア、日本は、福祉国家建設を目指す</p> <p>(3) 福祉国家の限界 1970年代に頂点を迎え、限界 経済成長の低下、高齢人口の増加 環境に被害 経済成長による公害の深刻化 →「福祉と環境の矛盾」</p> <p>(4) 新自由主義(小さな政府)の席卷 1980年代 民間活力の重視</p> <p>(5) 新自由主義への反省 格差の拡大、社会の分断 地球環境問題の深刻化</p> <p>(6) 「環境福祉国家」への展望 北欧・ドイツ 「緑の福祉国家」 誰も快適な環境の中で社会的弱者も地域社会の一員として暮らす「インクルーシブ社会の形成」を目指す</p>
---	---

もう一つ、大阪の例を挙げたいと思います。大阪の浪速区で、私どもが作った一般社団法人緑の風西川です。西川さんという方は保護司をされている方で、元受刑者の社会復帰を進めたいのだが、なかなか良い職場を見つけることができないとのことで、ソーシャルファームに注目されました。西川さんの家は、100年の伝統のある手作りのかばん屋さんです。そこで私と西川さん

が一緒になり、この緑の風西川というソーシャルファームを立ち上げました。現在は牛や豚やイノシシ、普通の皮を使ってかばんを作り、これで現在、元受刑者や障害者の方に働いていただいています。

私の次の目標は、できれば北海道のエゾシカの皮を使いたいという夢を持っています。なぜエゾシカかといえば、私は環境省の事務次官の時に北海道に行きました。そうすると北海道では、農産物等に被害を与えるエゾシカは毎年1万頭近く殺されているのです。しかし、肉はジビエ料理に利用されていますが、皮はほとんど利用されておらず、もったいないと思ったのです。そこで、この皮をなめしてプロの西川さんに見せると、素材は良質でかばんやジャンパーになるということで、始めようと思いました。しかし、これは見事に失敗しました。なぜかと言えば、北海道にはなめし工場がなく、北海道で捕殺したエゾシカを塩漬けにして奈良へ運んでなめすと、全く採算に合わない。そこで次の段階で私どもが考えているのは、北海道になめし工場を作れないだろうかということです。これを称してマタギプロジェクトと呼んでおります。いまのところまだうまくいかないのですが、ある日コンピューター放送をやっているジェイコムから、1時間の放送で全国へ訴えてみればいかがでしょうかと誘って下さいました。ジェイコムのスタジオは東京スカイツリーの横にあり、その公開スタジオで約30分間私が話して、30分間実演しました。コンピューター放送の影響力はすごいです。ただちに全国から、うちのところにシカがいる、イノシシもいる。仕事に就けない障害者や元受刑者もたくさんいるなど、概ね100団体から一緒にやりたいというお話がありました。なめし工場を営んでいる墨田区の山口さんという方からは、自分がなめし技術を教えてあげるといふ温かいお話もいただきました。この案件は現在まだ進行中であります。

3番目の埼玉県飯能市のNPOたんぼぼですが、ここは固定種による自然農法をやっています。引きこもりの人や長期失業者による農業をやっているソーシャルファームです。長い間引きこもりをしていた方も、この固定種による農業をやることによって引きこもりを完全にやめて、いまは大変元気に地元の人と話し合って暮らしております。私のところに年に2回程度収穫した作物を届けて近況報告してくれています。やはりこのような農業、環境の仕事は引きこもりの解決になるというように思ったわけであります。

それでは、まちづくりへ移りたいと思います。環境福祉のまちづくりですが、一つはブラジル・クリチバの緑の交換事業。これは有名ですから、環境の関係者はほとんどご存じかと思います。クリチバはブラジル南部にある人口170万人の大都市です。そこに荒廃した地域があり、そこをなんとか綺麗にしたいということで、大阪府立大学農学部出身の中村ひとしさんが、戦後クリチバへ渡られて始められたものです。私が行なっている環境と福祉と同じではないですかと教えていただいたのですが、調べてみるとまさにそ

のとおりでした。その地域をなんとか綺麗にしようと、ごみを分類して集めた場合は、その重さの4分の1の食料を渡す。そうすると、生活に困窮している人たちは食料で生活が豊かになる。また、地域はごみがなくなってきれいになる。まさに環境も福祉も良くなるという事業でした。これはその後、国連環境計画に表彰されています。

それから私の地元富山市のコンパクトシティです。ちょうど私が環境省の事務次官をしていた時に、当時の森市長が始められました。LRTという低層の高齢者が利用しやすい電車を導入し、一般の人も自動車ではなくLRTを利用しようという活動です。またできる限り市の中心部へ住んでいただこうと、公共建物も中心部へ集めることで大変成功し、まさに環境にも良い、福祉にも良いまちづくりになっています。

このように考えてみると、これからの社会の在り方に対して、大きな方向付けができていないのではないかと思います。学生時代から、私は福祉国家というものへ夢を持っておりました。日本も福祉国家になれば良いということで勉強し、大阪の釜ヶ崎などで活動し、障害者施設でボランティア活動をしてきました。そのような関係で、ベヴァリッジ報告などもよく読みました。それはまさに福祉国家の理論的な基礎ですが、そこへ既に福祉国家が戦うべき五つの巨悪が書かれています。貧困や病気など共に劣悪な環境もあるのだ。もう既に福祉国家というのは、環境抜きにしては考えられないのです。これはまさに、福祉国家とはそういうものだろうと思いました。

戦後ヨーロッパは、福祉国家を目指しました。オセアニアも日本もそうです。しかし1970年代に頂点を迎え、限界に達します。なぜ限界に達したかといえば、成長が低下し、高齢化社会となり負担が重くなったからです。それとともに、福祉国家は環境に被害を与える。なぜならば、福祉国家をするというのはパイを大きくしなければいけません。そのためには、環境を犠牲にせざるを得ない。福祉国家になればなるほど、環境にマイナスを与えてしまうということ、福祉と環境の矛盾ということが指摘されるようになったからです。そしてその後、福祉国家に代わるイデオロギーとして、新自由主義が世界を席卷します。それに対する反省として、例えば地球環境がこれによって深刻化している、格差が拡大している、社会を分断しているということが言われるようになりました。そうなればこれからの新しい方向とは何なのか。もう答えは明らかだと思います。環境にも福祉にも良い、そのような社会を目指していかなければいけません。私はそれを環境福祉国家というように呼んでおりますが、例えば北欧やドイツの中では、緑の福祉国家を目指すということをスローガンに掲げている国も出ており、それと同じような意味であります。

私はこれからの社会というのは、結論的にいえば、誰もが快適に住む環境の中で、社会的な弱者も地域社会の一員として暮らすインクルーシブ社会の形成を目指す。まさにいま社会の中には、例えば障害者の方、貧困の方、高齢の方、元受刑者の方、LGBTの方、引きこもりをしている方、など大勢いらっしゃるのです。私はこのような人は日本に3000万人いると推計しております。このような人々を社会の一員として取り込まなくては、これからの社会は成り立たない。いまのように所得格差が拡大して社会が分断し、分裂する社会ではもう立ちいかないわけなのです。

まさにこのような人を社会の中に取り込んでいく、インクルーシブ社会を一日でも早く形成するようにしなければいけません。私も微力ではありますが、そのような発言と活動を続けているわけでありまして。どうも清聴ありがとうございました。

(終了)